



パトラス株式会社

代表取締役 CEO 後藤 典夫 氏

■企業概要

本 社：茨城県水戸市河和田町5002-1

設 立：平成22年10月1日

従 業 員：6名

事業内容：パトラス事業

水戸市に本社を置くパトラス株式会社の後藤社長は、「パッケージ革命」といえるほど食品・包装業界に大きな影響を与えた「テトラ型立体包装Patruss®(パトラス)」を開発しました。

これは、平成15年に同氏が設立した有限会社水戸菜園が生産するベビーリーフなど柔らかい野菜を潰さず、新鮮なままお客様に届けたいという想いから誕生したものです。

現在、国内外でパトラスの需要が高まっており、同氏は「今後、世界中にパトラスの魅力を広めていきたい」と語っています。

赤塚支店小國支店長と一緒に、ユニークな包装容器が包む大きな“夢”について取材しました。

(インタビュー日：平成29年7月6日)

[聞き手：筑波総研(株) 専務取締役 藤咲耕一]

どの若葉を何種類も混合したもので、栄養価が高く、見た目も鮮やかな高級野菜の1つです。「イタメシ」ブーム以来、サラダや肉料理の付け合わせとして人気を集めていたため、私は今後ますます需要が伸びると確信していました。

また、これらの野菜は当時輸入に頼っていたため、国内産が少なく新しいマーケットを創造できるのではないかと考えました。



ベビーリーフのサラダ

御社の事業概要についてお聞かせください。

■退職後に心機一転、農業生産法人を設立

私は、49歳の時に27年間勤務した企業を早期退職し、心機一転、農業の世界に飛び込みました。そして、平成15年に農業生産法人・有限会社水戸菜園を設立しました。

最初に目をつけた野菜は、ベビーリーフとパプリカです。ベビーリーフとは、ルッコラや水菜な

私は事業を始めるにあたり、アメリカやオランダ、ニュージーランドの農場を視察し、マーケティングを学びました。そして帰国後、水戸市郊外に50aの農地を借り、営農を開始しました。

しかし、事業を始めてすぐにパプリカの輸入量が増加したため、価格は下落し、規模拡大も見込めなくなりました。そこで私は、ベビーリーフや葉物を生産の中心に切り替え、事業を進めることにしました。

事業を進める上で大切にしている視点や栽培方法の特徴などについてお聞かせください。

■ お客様に新鮮な国産野菜を届けたい

私は農業を始める際、「国産」の「良い野菜」を「高い鮮度のまま」お客様の食卓に届け、喜んで頂きたいと考えていました。

そのため、野菜を育てる土は「太陽熱消毒法(※)」などによって土壌改良を行い、さらに、ミネラルがたっぷり入った肥料を使うことで野菜が美味しく育つ土づくりを行っています。

栽培するベビーリーフの種類は「美味しさ」「食べやすさ」「食感」「色合い」の良さを追求して選んでいます。また、栽培時は農薬をほとんど使いません。その代わり害虫の天敵であるテントウムシを利用したり、手作業で雑草を処理するなど「安全・安心な農法」にこだわっています。

さらに、収穫した野菜の鮮度を保つために、葉を摘み取ったら農場内に設置してある冷蔵庫に入れてすぐに冷却し、外気に触れることなく出荷先へ配送することを心掛けています。

■ 「JGAP認証農場」として登録

当社は、新鮮な野菜を安全に育てる農場として、日本GAP（ジェイギャップ）協会の「JGAP認証農場」として登録されています。

JGAPとは、農林水産省が導入を推奨する農業生産工程管理手法の1つです。この認証を受けると、お客様やお取引先に対して「農場が食の安全・安心と環境保全に取り組んでいること」をアピールできます。当社も認証されたことで信頼度が高まり、販路の拡大につながりました。

また、当社は今まで行ってきた農場管理を文書化して「農業の見える化」を図るほか、農場の組織やルールを明文化する「帳票の作成」、農場や倉庫内外の整理整頓なども実施しました。

新しい取り組みを行い、さらにそれを維持することは大変でしたが、作業効率が格段に上がるなど多くの成果として返ってきました。

事業の課題点とそれを乗り越えて誕生した「パトラス」についてお聞かせください。

■ 新鮮なベビーリーフが潰れてしまう…

ベビーリーフ生産を開始して最初の5年間、私は仲卸やデパートなどへ営業を展開しました。しかし、販売高は伸び悩んでいました。

要因は、ベビーリーフは種をまいて40～60日後のやわらかい幼葉を使うため、収穫後2～3日でおれてしまい商品価値が下がってしまうこと、通常のビニールパックに入れると輸送時に潰れてしまい、それを解消するためにプラスチックトレーに入れるとコストがかかる上、機密性も低くなってしまおうという点でした。

私はこの時「今までは、野菜を生産するだけで販売流通方法までは考えていなかった。しかし、消費者が野菜を口にするとところまで配慮するのが、私たちの役目である」と気が付きました。

そこで、消費者の代表である主婦をはじめ、バイヤーや直売所などへ丁寧にヒアリングを行い、改良のヒントを探していきました。

■ テトラ型立体包装「Patruss®」の誕生

包装方法の研究が1年を過ぎようとしていた頃、私はいつも平面密着するフィルムを90度垂直にシール止めして、三角錐を作ってみました。

すると、中に詰まった空気がクッションとなり、中身が潰れにくいパッケージができ上がったのです。これが、テトラ型立体包装「Patruss®」が誕生した瞬間でした。



立体包装「Patruss®」

※太陽熱を利用することで土壌を消毒する環境に優しい土壌消毒法

■ パットラスは「パッケージ革命」

この立体包装は、圧力に強い4面体で、“パツ”と開けられて、三角形が基本単位の“トラス”構造という意味から「Patruss® (パットラス)」と名付けました。

パットラスの7つの特徴

- つつむ：立体的な状態でフィルムをシール止めし、空気と一緒に中身をつつむ
- まもる：封じ込められた空気とテトラ型の構造により、強度を保って中身をまもる
- はこぶ：テトラ型が積み重ねられて組み合わせり、運ぶ時にもがっちりとお互いを支え合う
- みせる：新鮮に保たれた自然な空間が、袋の中身を生き生きとみせる
- ひらく：「スーッ」と心地良くひらく開封感は、何度も試作を度重ねた賜物
- つかう：開いたままテーブルに置くことで、そのままお皿として使える
- すてる：これだけの機能を十分に備えながらも、最終的には破棄されるのはフィルムのみ

パットラスは、野菜自体が呼吸することで袋の中が低酸素状態になり、鮮度を保つことができます。冷蔵庫で保管する場合、日持ちは1週間以上とこれまでとは比べものにならないほど飛躍的に延長することができました。

業者の方からは「あまりにも中身が腐らないので、変な薬でも使っているのではないか」という“嬉しい問合せ”があったほどです。私はパットラスが「パッケージ革命」といえるほど、食品・包装業界に大きな影響を与えることができるのではないかと考えています。



社員が一つひとつ手作業で袋詰めしている

■ 「包装」と「容器」の2面性を持つ

商品棚に並んだパットラスについて、お客様からは「様々な角度から中身を確認できて安心」、また、特に女性の方からは「三角形がとてもかわいいので、つい手に取ってしまう」と好評です。

さらに大きな特徴は、包装の中央接合部を左右に引っ張りながら開封すると、お皿としても利用できることです。パットラスは包装の簡略化だけでなく、洗い物もゴミも省略できる「エコ包装」として、高い評価を頂くことができました。

両端を左右に引っ張りながら
中央接合部を開く



■ 国内外で数々の賞に輝く

パットラスは「いばらきデザインセレクション 2006年特別賞」を皮切りに、「2007年グッドデザイン中小企業長官特別賞」、「2008年日本パッケージコンテスト食品包装部門賞」、さらに世界的に権威のある「2008年国際包装機構World Stars for Packaging Awards」など多くの名誉ある賞に輝きました。

特に、日本グッドデザイン賞審査員で、日本を代表するグラフィックデザイナーの1人・佐藤可士和氏からは、以下のようなコメントを頂くことができ大変嬉しく感じています。

「本当に良く考えていろいろな問題を解決している。あらためて、デザインするとは？グッドデザインとは？を考えさせられる。ありそうでなかったこの『パットラス』から、より便利でシンプルになる未来の生活が見えてくる。(※)」

また、他の審査員からも「野菜を生産する延長で、お客様に喜んで納得して選んで頂きたいという姿勢から生まれたパッケージ」という点を高く評価して頂きました。

※私の選んだ一品（日本産業デザイン振興会編）グッドデザイン賞審査員コメント集7より抜粋

■ パットラス株式会社を新設

私は「パットラス」を商標登録し、軌道に乗った1年後には水戸菜園の売上を3倍にまで伸ばすことができました。

また、平成19年には「パッケージ中央から開封すると舟型の皿として使用できること」をポイントに、念願の特許(4388952号)も取得しました。



パットラスのロゴマーク

さらに私は、パットラスのライセンス事業を行うことを目的として、平成22年10月に「パットラス株式会社」を新設しました。

現在、大手コンビニ用に包装資材メーカーなど複数企業とライセンス契約を結んだことで、全国のコンビニ棚には、コーンや枝豆などの総菜が入ったパットラスが続々と登場しています。

■ 10カ国以上の国と地域で活用

私は「世界中にパットラスを広めたい」と考え、国際特許も取得しました。また、各国のバイヤーが集結する商談会では、食品・包装業界の方から「簡単に開封可能でお皿にもなるパットラスを活用したい」と多数の問合せを頂きます。

現在、シンガポール、キプロス、台湾、メキシコ、アメリカ、EU諸国などの企業と提携し、スナックをはじめとしてハーブや野菜、サラダなどの包装容器として世界各国に広まりつつあります。



世界中で利用されているパットラス

今後の事業展開についてお聞かせください。

■ パットラスに“夢”を詰める

現在、フィルムをテトラ型に成形する作業は、社員が手作業で行っているため、大量生産するには限界があります。また、ライセンス契約中の企業も既存の包装機械を改造して対応中です。

私は、今後、世界中にパットラスを広めていきたいと考えています。そして、多くの企業がこのユニークな包装容器を使って様々な“夢”を詰めて頂きたいと願っています。

その実現のために、今後、機械メーカーなどと連携しながら、新しい包装機械の開発に邁進したいと考えています。

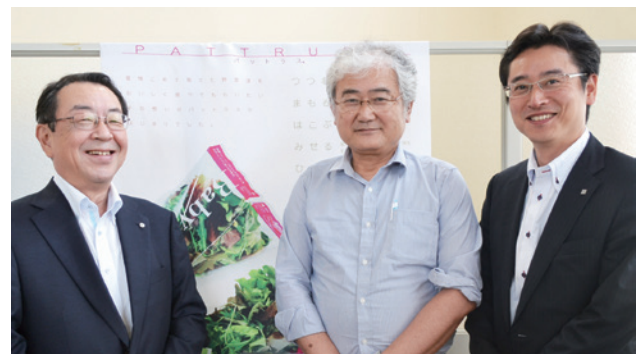


生花などアイデア次第で様々な商品を入れることが可能

■ パットラスは「ベストオブクールジャパン」

先日、NHK番組「cool japan発掘！ かつこいいニッポン」という取材の中で、過剰包装の日本において、パットラスのシンプルな包装法は、“ベストオブクールジャパン”と評価して頂きました。

これから、私のようなアントレプレナー(起業家)が多く登場し、世界中に刺激を与える「クールジャパン」が数多く誕生することを願っています。



後藤代表取締役(中央)を囲んで
赤塚支店小國支店長(右)と聞き手・藤咲耕一

この度は、長時間にわたり貴重なお話をお聞かせ頂きまして、誠にありがとうございました。御社の今後益々のご発展をご祈念いたします。